

葉山幸嗣先生を偲んで(葉山幸嗣准教授追悼号)

著者	平井 宏典
雑誌名	和光経済
巻	52
号	1
ページ	x-x
発行年	2019-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1073/00004698/

葉山幸嗣先生を偲んで

平 井 宏 典

2013年4月、私は和光大学に葉山先生と同期として着任しました。葉山先生とは年が近いこともあり、打ち解けるまで時間はかかりませんでした。しかし、趣味等の共通点はあまりなく、性格的にも対照的だった私たちが心を許せる間柄となれたのは、着任した年から入試、次に教学と、同じ委員を務めたことが大きかったように思います。

特に、教学ではカリキュラムの改編期にあたり、経済・経営両学科で新カリキュラムを検討中だったこともあり、葉山先生とは原案作成の段階から議論を重ねました。このカリキュラムによって長らく学部共通で進めていたゼミナール等が各学科の独自のものになりました。このことにともなって、旧カリキュラムとの間に生じる齟齬にどのような対応ができるのか、システムが変わったとしても従来通り共通で取り組める業務はあるのか等をひとつずつ丁寧に確認していく作業が求められました。

閃き重視で大雑把な私がサッと案を出して青写真を描くと、丁寧に物事を進めていく葉山先生は、常に一回立ち止まってこれでいいのかどうかを慎重に確認していました。私たちの性格が対照的だったからこそ良い役割分担ができた、私は都合の良い解釈していましたが、実際には葉山先生に助けられてばかりだったと今にして思います。

もうひとつ葉山先生のことを思うと気遣いの人だったと思います。打ち合わせ等で電話をすると、葉山先生の方が年上で、私の研究室の方が散らかっているのに、必ずこちらに出向いてくれました。着任して最初の頃の全学教授会で、どこに座っていいか右往左往した私たちは次からは一緒に座ろうと約束すると、葉山先生は必ず時間より前に来て私の席を確保してくれていました。この6年間、毎月1回、私の右隣にはいつも葉山先生がいる全学教授会でした。今あなたのいない全学教授会で、私はいつも右往左往しています。

思い出は尽きませんが、私の中で強く心に残っているのは共同で実施したゼミナール3年生対象の海外合宿（香港研修）です。2日目の夜、学生が全員ホテルに戻ってきたことを確認すると私たちは遅い夕食代わりにバーへ行きました。高層ビルの最上階、100万ドルの夜景を眼前に望むバーを気に入った葉山先生は翌日も行こうと言い、それ以来、私たちが香港に来た際には必ず立ち寄る場所ができました。

現在、香港は民主化運動の真っ只中にあり、混迷を極めています。今年度はゼミで行くことはできなくなりましたが、私はこの騒動が一段落したら早々に様子を見にいきたいと考えています。一緒に行けないのは残念ですが、空に近いあのバーで葉山先生に献杯したいと思います。